

復興の光をともし新しい場所 震災前よりももっともっと魅力的なまちに

復興ボランティアセンター
センター長 井内 聖さん
副センター長 林 賢司さん
復興支援員 台正人さん
復興支援員 溝口 駿さん

——復興ボランティアセンター立ち上げの経緯を教えてください。

林 僕は、安平町の

「地域おこし企業人」としてコミュニティづくりをテーマとし



林 賢司さん

た業務を震災前から行っていました。話は一度震災でストップし、僕も災害ボランティアセンターで活動していましたが、再び動き出し、平成30（2018）年11月1日に地域おこし企業人として着任しました。復興ボランティアセンターの立ち上げは、着任の2週間くらい前に災害ボランティアセンターの今後について、井内さんと話したことが始まりでした。井内 その頃はまだ商店も閉まっています、顔見知りのお店の方々はみんな疲れきって

いました。このままでは商売をしている人は本当に大変だと感じたんです。週末

以外はボランティアも日に日に減っている



井内 聖さん

状況でしたが、安平町役場の人たちはやらなければならぬことがまだまだたくさんあって、倒れるんじゃないかと思うほど精いっぱい働いている。商店街は自力で立ち直れそうにない。だとしたら、残ってくれているボランティアの力も借りながら、町を元気にするために何かしよう——それが復興ボランティアセンターです。ただ、その活動は災害ボランティアセンターとは異なるものになりますから、一般社団法人の認可を受けて11月6日に立ち上げました。

——クラウドファンディングも活用されたと聞きました。

林 この「ENTRANCE」のオープンにあたって活用しました。復興ボランティアセンターとは別の話になりますが、安平町ではクラウドファンディングの活用を推進する事業が行われています。これは

「安平にチャレンジの文化をつくらう」という狙いからで、その先駆けとしてENTRANCEの改修費用とストーブの購入費用の一部をクラウドファンディングで集めました。ENTRANCEでのチャレンジが背中を押すように、その後は、クラウドファンディングに挑戦して成功したグループがいくつも出ています。一つは少年野球のチームが、液状化で使えなくなったグラウンドの代わりに室内球場をつくりたいという目的で挑戦して成功し、今では自分たちの練習場で練習ができています。ほかにも、障がいのある方の居場所となるコミュニティサロンをつくりたいとNPOが挑戦されて、成功されています。

——今お話をうかがっている、この「ENTRANCE」というスペースが活動の拠点ですね。

林 災害ボランティアセンターは、復旧活動を通じて「マイナスをゼロにする活動」を行います。復興ボランティアセンターは「ゼロからプラスを生んでいく活動」を行っています。ただ、「地域を盛り上げよう！」と言っても、町民の気持ちや前向きになっていなければ何も変わりませんよね。本当に地域を盛り上げるには、空気・雰囲気が必要で、そういう前向きなエネルギーが蓄積する「場」が必要だと思うのです。いろんな思いを持った町民が集まり、様々なことを語ったり、未来を考えたりする過程で、そうした空気・雰囲気は少しずつつくられていくのだと思います。

——センターの立ち上げと同じ時期に、中学3年生対象の「あびら未来塾」が始まっていますね。

井内 余震や家庭の事情で「千歳や苦小牧の塾まで子どもを通わせられない」というお母さんの声が聞こえてきたのが始まりでした。僕も元は中学校の教師でしたので、3年生の受験は気になっていました。そんな状況から「塾をやろう」という話になったんですが、教えられる人がいない。そこで、「教えないけれど、みんながここに集まって勉強ができます」という塾をつくったんです。それと同時に、教えてくれる人、生徒の相談に乗ってくれる人をボランティアで募集しました。すると、塾の先生や現場の先生、苦小牧や旭川など色々な所から人が来てくれました。飛行機に乗って、毎週のように横浜から来てくれた方もいました。

災害ボランティアセンターも同じですが、子どもたちや住民など当事者の悩める声を「困っている方がいるので助けてくれませんか」と代弁して伝えることが、ボランティアセンターの役割だと改めて感じました。あびら未来塾は、今は形を変えて、



復興ボランティアセンターの活動拠点「ENTRANCE」

安平町の公営塾「教えない放課後教室あびらぼ」として運営を続けています。

——復興ボランティアセンターでは、どのような取り組みを行っていますか？

井内 一つは「ハシゴ酒」というイベント的な取り組みです。

台 そもそもその始まりは、商店街の方から「震災以降、町に人が出歩いていない」という言葉を聞いたことでした。ちょうど平成30（2018）年の年末、「自粛ムードで町に人が歩いていない」という声も出ていたことから「ハシゴ酒忘年会」と題したイベントで「町民と商店街を巻き込んで、町に元気を取り戻そう！」という話になりました。驚くことに、初回から80人以上が集まったんです。イベント当日はスタート地点に集合して、みんなで乾杯。そこらばらばらになって、追分地区の飲食店やスナックなど10店舗を巡りました。



台 正人さん

イベント終了後に「早来でもやりたーい！」という声が上がって、年が明けてから「ハシゴ酒新年会」を早来地区で開催しました。これも大盛況でした。ハシゴ酒イベントは町民の心をがっちりつかみ、結果的に1年間で6回も開催する大人気イベントになりました。

——お話をうかがっていると、安平町の元気が伝わってきますね。

井内 安平町の特徴だと思うんですが、民間というか、住民が積極的に動くんです。うちのセンター以外にも、震災後半年のうちにNPOが二つ立ち上がりました。一つは、子どもの遊び場をしっかりと確保しようという「はやきた子どもの遊び場づくりネットワーク」です。もう一つはスポーツ少年団「アビースポーツクラブ」で、震災でスポーツができる場所が減ったこともあり、バレーボールや野球、サッカーなど各競技団体が手を組んで立ち上げました。

加えて、先ほど話が出ていたクラウドファンディングですね。資金から自分たちで集めることにチャレンジしようという機運が、安平町にはあるように思います。そして行政も、住民が立ち上がることに對して応援してくれる。そういう意味でも、行

政と住民の間にはいい関係が築けているように思います。

——まちづくりの専門家として、林さんは安平町の復興をどのようにご覧になっていますか？

林 すでに復興に向けた様々な取り組みが行われていて、前に進んでいると考えています。井内さんがおっしゃったように、新しいことにチャレンジしようという人もどんどん増えていると思いますし、安平町役場の皆さんも新しい取り組みを積極的に応援してくれています。

安平町には「子育て・教育を中心としたまちづくりを進めていく」という明確な方針があります。その象徴的な存在として注目されるのが、地震で壊れてしまった早来中学校に代わって建てられる早来小中一貫校です（令和4年度完成予定）。新しいスタイルの学校というハード面だけでなく、ソフト面でも学校教育と社会教育を連携させた教育が行われるなど、安平町を代表する、魅力ある施設となるように準備が進められています。

安平町の復興を「まちづくり」的な観点

で捉えると、震災後の復旧に向けた動き出しが早く、そのエネルギーとスピードのま、復興ボランティアセンターや二つの新しいNPOも立ち上がったということで、まさにピンチをチャンスに変えたという印象があります。さらに令和元（2019）年には「道の駅あびらD51ステーション」という経済面での大きなシンボルが立ち上がっています。震災を機に、新しいことにチャレンジしようというポジティブな動き

が色々な形で出ていて、前向きな空気・雰囲気が育まれていると感じています。

——ボランティアをきっかけに移住されたお二人は、今後、安平町にどう関わっていきたいですか？

台 僕は「ENTRANCE」というこのコミュニティスペースが、新しい取り組みを始めるきっかけの場所になるように、しっかり運営していきたくと思っています。町民の方からもっと「こういうことをやりたいんだけど、どうかな」という熱い思いが生まれてくるような環境を整えて、アグレッシブな動きにつながったら嬉しいなと思っています。

溝口 私は今、観光協会で道の駅の運営にも携わらせていただいているので、年



溝口 駿さん

間80万人から100万人が来場するその場所を使って、安平町の魅力を町内はもちろん町外にも発信していきたいですね。



中学3年生を対象にした「あびら未来塾」



及川町長（中央）も参加した「ハシゴ酒忘年会」